



Title	15世紀の Lahn al- ^c Āmmah 研究 : al-Ġumānah fī ḥIzālat al-Raṭānahをめぐって (1)
Author(s)	依田, 純和
Citation	アラブ・イスラム研究. 2006, 5, p. 71-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105873
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

15世紀の Laḥn al-‘Āmmah 研究

—— *al-Ġumānah fī ‘Izālat al-Raṭānah* をめぐって (1) ——

依田 純和*

A Preliminary Study on Laḥn al-‘Āmmah of the 15th Century: On *al-Ġumānah fī ‘Izālat al-Raṭānah* (1)

The most conspicuous difficulty for the historical study of Arabic dialects is that we cannot obtain ample written documents. In such situation, indeed it is quite difficult task to trace the history of Arabic dialects, we can, however, find some documents indicating dialectal features. Among them we have “laḥn al-‘āmmah” literature, which is designed “to correct deviations by reference to the contemporary linguistic norm”. In the Maghrib area, *al-Ġumānah fī ‘Izālat al-Raṭānah*, allegedly compiled in the 15th century by an quasi-anonym author who lived Tunis and al-Andalus, holds a special position, since this work would reflect the linguistic situation of the Eastern Maghrib dialect. The purpose of this article is to make observation about historical development of phonology which the dialect had undergone until 15th century comparing with Classical Arabic forms.

0. はじめに

アラビア語諸方言の歴史的研究をする際の最大の障害は、十分な文字資料を得られないということである。いやしくも教養あるアラビア語話者が文字でその思想を表現する場合には、規範としての古典アラビア語を用いることが義務的となり、その伝統は現代まで継承されている。このような状況の中で、アラビア語方言の歴史の変遷の研究は大変困難なことではあるが、散発的に古い時代の口語アラビア語の姿をほのめかすような材料が存在するのも間違いないことである¹⁾。

一つはいわゆる Middle Arabic による文献であり、ここでは古典アラビア語の規範からの逸脱が多く見られ、その逸脱が文献の書かれた時代の口語を反映している可能性がある。もう一つは laḥn al-‘āmmah と呼ばれる文学ジャンルで、これは古典アラビア語の使用に関して、「これこれのように言うことが行われているが、正しくはこれこれである」というような形式によって、規範である古典アラビア語と実際に行われ

* 大阪外国語大学 非常勤講師

1) Fischer *GAP* Band I p. 89 ff.

ていた形式の違いを指摘していくものである²⁾。しかし、歯間摩擦音と対応する閉鎖音の交代や hamzah の消滅などに関しては、複数の異なった laḥn al-‘āmmah の作品の中に共通して誤用として挙げられており、laḥn al-‘āmmah という分野において一つの決まったスタイルがあったことも考えられる³⁾。従って各々の作品で誤用 (laḥn) として挙げられている例が、必ずしもその作品が著された時代・場所で特徴的な言語現象である保証はないので、laḥn al-‘āmmah は扱う際に十分な注意が必要である。

マグリブ地方においても多くの laḥn al-‘āmmah が著されたが、大部分はアンダルシアの学者の手によるものである。その中でも15世紀にチュニスとアンダルシアに住んだ者によって著されたとされる *al-Ġumānah fī ‘Izālat al-Raṭānah* は、東部マグリブの言語状況を伝えている可能性があるという点で特異な位置を占める。

本稿の目的は、この作品に表れる laḥn とされる形式を古典アラビア語の形式と比較し、15世紀までに東部マグリブで生じていたであろう言語現象を観察するものである。

1. *al-Ġumānah fī ‘Izālat al-Raṭānah* (以下 al-Ġum.)

この作品の著者は、校訂者の Ḥasan Ḥusnī ‘Abd al-Waḥḥāb によると、Ibn al-Imām という名で、イスラーム暦9世紀半ばから10世紀半ばに、チュニスに居住していた者である。校訂者は、Ibn al-Imām はチュニス出身で、生涯のうちにアンダルシアに住んだ経験があるか、またはアンダルシア、恐らくグラナダ出身でチュニスに移住したとしている。アンダルシアにいたことがあるという根拠は、作品中に見られる誤用としての例が、アンダルシアに特徴的な現象であるとしている⁴⁾。しかしながら本稿の筆者は、2.1.[2] に述べるような理由からこの意見には与しない。

al-Ġum.には172の laḥn の例が見られ、そのうち130は音韻論に関するものである。上で述べたようにこれらの例のうちいくつかは、15世紀のチュニスの言語状況を示していない可能性があるが、個々の例について、それが正しい情報であるかを判断することは困難である。従って作業仮説として本稿で取り扱う例は、全て正しいものとして扱う。

【注 意】

1. 本稿では以下のような略語を用いる: CA = Classical Arabic, Mod.Tun. = Modern Tunisian dialect.
2. 本稿では、*d* は CA ض を、*ḍ* は現代チュニス方言の咽頭化歯間有声摩擦音を示す。*g* (破擦音) は CA ج を表し、*z* (摩擦音) は現代チュニス方言に現れる音素を表す。

2) EF² “Laḥn al-‘āmma”.

3) Fischer GAP Band I p. 91 ff.

4) ‘Abd al-Waḥḥāb *al-Ġumānah* p. ٤.

2. al-Ġum. に見られる音韻現象

2.1. 母音

2.1.1. 短母音

母音に関しては次のような例が観察される。

[1] CA *a* > al-Ġum. *u* (11例)

rumād (CA *ramād*, cf. Mod.Tun. *ṛmād*) “ashes”, *ʿumur* (CA *ʿumur*) “Umar”, *ruṭub* (CA *ruṭab*) “ripe dates”, *ḥudbah* (CA *ḥadabah*) “hunchback”, *sukkur* (CA *sukkar*, cf. Mod. Tun. *sukkur*) “sugar”, *suḥūr* (CA *saḥūr*) “last meal before daybreak during the month of Ramadan”, *fuṭūr*⁵⁾ (CA *faṭūr*) “breakfast”, *nuʿām* (CA *naʿām*) “ostrich”, *nuʿamah* (CA *naʿamah*) “ostrich”, *ruṣāṣ* (CA *raṣāṣ*) “lead”, *yaʿuḍḍ* (CA *yaʿaḍḍ*, cf. Mod.Tun. *yʿaḍḍ*) “he bites”

CA *a* の al-Ġum. *u* への変化は、CA *a* が咽頭音または強勢音の周囲にあるときにみられる。*r* が同様の变化を引き起こす要因となっているのは奇異に見えるが、むしろこの場合当該の *r* は強勢音の *ṛ* であったと考えるべきである。注意すべきは al-Ġum. *yaʿuḍḍ* で、現代チュニス方言ではこれに対応する語は *yʿaḍḍ* で、関係する母音が古典アラビア語と同一となっている。

[2] CA *a* > al-Ġum. *i* (27例)

al-sibt (CA *al-sabr*) “Saturday”, *niwā* (CA *nawā*) “date pits”, *ʿiʿrābiyy* (CA *ʿaʿrābiyy*) “an Arab of the desert”, *ḡibhah* (CA *ḡabhah*) “forehead”, *ʿisr* (CA *ʿasr*) “strap”, *sinām* (CA *sanām*) “hump of the camel”, *biḍʿah* (CA *baḍʿah*) “piece”, *ṭiḡr* (CA *ṭaḡr*) “front teeth”, *xitt* (CA *xatt*) “line”, *ḡiwār* (CA *ḡawār*) “slave girls”, *riḥā*⁶⁾ (CA *raḥā*) “mortar”, *al-biṣrah* (CA *al-baṣrah*) “Basra”, *kittān*⁷⁾ (CA *kattān*) “linen”, *ṭidy* (CA *ṭady*) “female breast”, *ḡidy*⁸⁾ (CA *ḡady*) “kid”, *yimīn* (CA *yamīn*) “right”, *yisār* (CA *yasār*) “left”, *diḡāḡah* (CA *daḡāḡah*) “chicken”, *ṣitwah* (CA *ṣatwah*) “rain”, *ḥilqah*⁹⁾ (CA *ḥalqah*) “ring”, *ḡidd*¹⁰⁾ (CA *ḡadd*) “grandfather”, *nisr* (CA *nasr*) “eagle”, *niḡm* (CA *naḡm*) “star”, *nidā* (CA *nadā*) “moistness”, *sikrān*¹¹⁾ (CA *sakrān*) “drunk”, *yamillu* (CA *yamallu*) “he becomes bored”, *kinnah* (CA *kannah*) “daughter-in-law”

CA *a* の al-Ġum. *i* への変化は、CA *a* が咽頭音・強勢音 (*ṛ* を含む)・唇音 *m* の周囲に無いとき、即ち上の [1] 以外の環境で現れる。al-Ġum. は Laḥn al-āmmah であり、誤用を指摘する作品なので、CA *a* が al-Ġum. の時代に変化を蒙っていない場

5) *fuṭūr*; Dozy *Supplément* vol. II p. 276.

6) *riḥā*; Corriente *Andalus* p. 204.

7) *kittān*; Dozy *ibid.* vol. II p. 453.

8) *ḡidy*; *ibid.* vol. I p. 177.

9) *ḥilqah*; *ibid.* p. 317 但し “dé à coudre” の意味で。

10) *ḡidd*; *ibid.* p. 174.

11) *sikrān*; *ibid.* p. 667.

合については記述が無い。従って [1] と [2] の例は、必ずしも全ての CA *a* が *i* や *u* に変化していることを意味するわけではない。

【補 足】 al-Ġum. の校訂者 ‘Abd al-Waḥḥāb は、著者 Ibn al-Imām はアンダルシアで生活した経験があるとしておりその根拠として、

كثيرًا ما يورد من أغلاط عامية الأندلس ... مثل إيراد كلمات (رَحَى — نَوَى — نَدَى) و(الدجاجة) بكسر الدال عوض الفتح وهي لغة أندلسية خاصة، وقد ينطبق به مفتوح الدال في اللهجة التونسية قديمًا وحديثًا.

と述べている¹²⁾。しかしながら、本稿の著者は「الدجاجة」の *al-dāl* の母音が古い時代も現代も *a* である」という点に関しては賛成できない。というのは、まず ‘Abd al-Waḥḥāb は古い時代のチュニス方言でこの語の *al-dāl* が *a* で発音されていたという証拠を示しておらず、また現代チュニス方言では *džāza* であり、*al-dāl* は母音を持たない。また、アンダルシア方言で観察される CA *a* の *i* への変化は、同様の現象がチュニス南部の Marāzīg 方言で観察されることから、15世紀のチュニスでも存在したと推測できる。

Boris Lexique には、当該の母音があいまい母音として現れている次のような例が見られる: *d’zāz* “poule”, *n’dē* “rosée”, *ṛhā* “meule à bras” (あいまい母音の音色は音韻環境により異なる)。これらの例のあいまい母音は、開音節の短母音の弱化の結果と考えることが出来る。因みに現代チュニス方言では、このような母音は完全に脱落している (cf. *džāz* “chicken”, *ndā* “humidity”, *ṛhā* “hand mill”)。al-Ġum. に見られる CA *a* の al-Ġum. *i* 又は *u* への変化は、現在 Marāzīg 方言で見られる現象と同一のものである。

また、Ibn al-Imām は *ṭaniyyah* という語「道」という意味を持っており CA (「山道」) とは異なった意味で用いられているとしている。この語を「道」という意味で用いるのは東方マグリブに特有の現象である¹³⁾。これらの事実から、Ibn al-Imām がアンダルシアにいたことを否定するわけではないが、al-Ġum. は15世紀のチュニス方言について記述されたものであると考えることができる。

[3] CA *i* > al-Ġum. *a* (8例)

karkarah (CA *kirkirah*) “rumbling noise”, *šarabta* (CA *šaribta*, cf. Mod.Tun. *šrabt*) “you drunk”, *bakr* (CA *bikr*, cf. Mod.Tun. *bikr*) “virgin”, *sal’ah* (CA *sil’ah*) “commercial article”, *xazānah* (CA *xizānah*) “treasure house”, *tabn*¹⁴⁾ (CA *tibn*, cf. Mod.Tun. *tbin*) “chopped straw”, *ḡaffah* (CA *ḡiffah*) “bank”, *qama’* (CA *qima’*) “funnel”

多くの場合 CA *i* は咽頭音・口蓋垂摩擦音・強勢音の周囲にあるとき *a* で現れている。*sal’ah* のような場合は直接隣接していないが母音の変化に影響している。

12) ‘Abd al-Waḥḥāb *al-Ġumānah* p. ㄡ.

13) Marçais *Initiation* p.203.

14) *tabn* ou *tibn*; Dozy *Supplément* vol. I p. 141.

例外的なのは *tabn* と *bakr* で、これは現代チュニス方言でも古典語と同様 *i* が現れる (*tbin*, *bikr*)。また *karkarah* については2つの説明が考えられる: ① *r* が強勢音である。② 後述の [5] に見られる CA *CuCCuC(ah)* > al-Ġum. *CaCCaCah* という変化を考慮すると、*CiCCiCah*, *CuCCuCah* 等の四語根名詞のパターンの *CaCCaCah* への統合が推定される。

[4] CA *i* > al-Ġum. *u* (4例)

*mušmāš*¹⁵⁾ (CA *mišmiš*) “apricot”, *dubbānah* (CA *dibbānah*) “fly”, *musanniyy* (CA *misanniyy*) “of whetstone”, *nuks* (CA *niks*) “weak”

al-Ġum. *mušmāš* と *dubbānah* は、現代チュニス方言では、それぞれ *mišmāš*, *dibbāna* と *i* が現れている。

[5] CA *u* > al-Ġum. *a* (2例)

damlag (CA *dumluḡ*) “bracelet”, *ḡamḡamah*¹⁶⁾ (CA *ḡumḡumah*) “skull”

この変化に関する合理的な理由は見当たらないが、上述の [3] の CA *kirkirah* > al-Ġum. *karkarah* と平行した変化で、*CvCCvC(ah)* のパターンの四語根名詞が一律に *CaCCaC(ah)* に統合されたと推定される。

[6] CA *u* > al-Ġum. *i* (3例)

*rimmah*¹⁷⁾ (CA *rummah*) “rope”, *fitātah* (CA *futātah*) “crumbs”, *bisī* (CA *bus*) “(a call to make a camel go)”

この変化の例は数が少なく変化規則を導き出すことは困難である。しかし、強勢音の *r* や円唇音が変化を引き起こしたと推定することも可能である。

[7] CA *a* > al-Ġum. (zero) (5例)

‘ašrah (CA *‘ašarah*) “ten”, *ḡafr* (CA *ḡafar*) “victory, triumph (vn. of *ḡafira*)”, *‘aḡm* (CA *‘aḡam*) “pit”, *darqah* (CA *daraqah*) “shield”, *ṭarf* (CA *ṭaraf*) “edge”

短母音の減少はマグリブ方言の特徴であるが、al-Ġum. ではこの現象の出発点を観察することが出来る。ここではアクセントの後ろにある短母音が (開音節でも閉音節でも) 脱落している。一方 [1], [2], [3], [6] に見られる *rumād*, *ḡiwār*, *xazānah* 等では、アクセントの直前の短母音は保持されている。一方 CA *kirkirah* > al-Ġum. *kárkarah* は例外的である。

[8] CA (zero) > al-Ġum. *a* (6例)

saman (CA *saṃn*) “clarified butter”, *‘amar* (CA *‘amr*) “Amr”, *ša‘ar* (CA *ša‘r*) “hair”,

15) مُشْمَش; ibid. vol. II p. 603

16) ḡamḡamah - au lieu de ḡumḡumah; ibid. vol. I p. 211.

17) rimmah; ibid. p. 557.

nahar (CA *nahr*) “river”, *ḥalaqah* (CA *ḥalqah*) “ring”, *baraq* (CA *barq*) “lightning”

ここでは新しい短母音の挿入という現象が見られ、これは [7] とは逆の現象のように見えるが、これこそが Urspringen のきっかけとなる現象である¹⁸⁾。主に古典語の名詞パターン CvCC の第二語根と第三語根の間に短母音が挿入され、CvCvC となり、語末の子音連続が回避される。

同様の現象はシリア・パレスチナ方言にも見られる: Damascus *xebəz*, Jerusalem *xubiz*, *xubuz* “bread” (CA *xubz*)。マグリブ方言では最終音節にアクセントが置かれる傾向があるので、この挿入された母音はアクセントを帯び、その結果本来の母音がアクセントを失い脱落し CCvC というパターンになる。但し al-Ġum. の時代には、この脱落は未だ生じておらず、現代のシリア・パレスチナ方言に見られるような CvCvC というパターンの状態である。

【注 意】 [8] では CA *ḥalqah* > al-Ġum. *ḥalaqah* のような変化が、[2] で CA *ḥalqah* > al-Ġum. *ḥilqah* のような変化が観察されるが、同義の語の異なった音変化の説明は今のところ困難である。

[9] 語頭短母音の脱落 (3例)

liyyah (CA *ʾalyah*) “fat tail”, *sās* (CA *ʾasās*) “base”, *fāq*¹⁹⁾ (CA *ʾafāq*) “he awoke”

この現象は現代マグリブ方言でも広く見られるものである。これらの3つの語は現代チュニス方言ではそれぞれ *liya*, *sās*, *fāq* と al-Ġum. と同一の形である。CA *ʾalya* > al-Ġum. *liyyah* では最初に語頭の *ʾa-* が脱落し **lyah* が得られる。これは二語根となるので *y* と音質の近い *i* が長母音、または *iy* として現れ *liyyah* (= *liyyah*) が得られたと推測される。

[10] 短母音の長母音化 (3例)

ʾamas (CA *ʾamsi*) “yesterday”, *ṭāġīn*²⁰⁾ (CA *ṭāġīn*) “pan”, *ʾātāt* (CA *ʾatāt*) “furniture”

[9]では語頭の *hamzah* が後続の短母音 *a* と共に脱落したが、ここでは *hamza* は保持され後続の短母音 *a* が長母音化している。一方 al-Ġum. *ṭāġīn* に見られる長母音化は、アクセントが最終音節に置かれるようになった結果と見るべきであろう。

[11] 二重母音の単母音化 (5例)

*lūḥ*²¹⁾ (CA *lawḥ*) “board”, *fūq* (CA *fawq*) “above”, *ġūf* (CA *ġawf*) “fear”, *qīḥ*²²⁾ (CA *qayḥ*) “pus”, *ġīrah*²³⁾ (CA *ġayrah*) “jealousy”

18) Stumme *Tunisischen* p. 5.

19) Dozy *Supplément* vol. II p. 297.

20) *ṭāzīn*; Dozy *ibid.* vol. II p. 27.

21) *lūḥ*; Schiaparelli *Vocabulista* p. 174.

22) *qīḥ*; Dozy *ibid.* p. 437.

23) *ġīrah*; *ibid.* p. 234.

古典アラビア語の *ay, aw* の単母音化は現代アラビア語諸方言で広く見られる。東方諸方言では、これらはそれぞれ *ē, ō* となるが、マグリブ定住民方言 (Mahdiyyah を除く) では *ī, ū* で現れる²⁴⁾。al-Ġum. では、この変化は *y, w* の直前の母音の変化 (それぞれ *ay > iy, aw > uw*) としてとらえられているので、それぞれ *bāb mā ḡā’a maksūran wa-hum yaftahūnahū*、および *bāb mā ḡā’a maftūḥan wa-al-‘āmmah taḍummuhū* の章に含まれている。しかしながら音質に関しては、これが実際は *ē, ō* であったのか、*ī, ū* であったのかは不明である。これが *ī, ū* であったとすれば、マグリブ定住民方言に特有の長母音体系 (*ā, ī, ū*) が既に15世紀には見られたということになる。

2.1.2. 長母音

長母音に関しては次のような例が観察される。

[1] 重子音化 (4例)

nay’ (CA *nī’*) “row”, *xayliyy*²⁵⁾ < *xayriyy* (CA *xīriyy*) “gillyflower”, *ḡayfān* (CA *ḡīfān*) “guests”, *zay*²⁶⁾ (CA *zī*) “clothing”

恐らくこれらの例に見られる二重母音化は過剰修正によるものと考えられる。これらのうち *zay* と *nay* は現代方言にも見られる形式である。

[2] *ā’i > al-Ġum. ī* (1例)

mīdah (CA *mā’idah*) “table”

恐らく強い *imālah* によって *ā’i > ēi > ēy > iy > ī* のような変化が生じたものである。

[3] 短母音化 (2例)

dāwud (CA *dāwūd*) “David”, *‘ayṣah* (CA *‘ā’iṣah*) “Aysha”

CA *dāwūd > al-Ġum. dāwud* は CA *ṭāḡīn > al-Ġum. ṭāḡīn* と逆の変化である。後者ではアクセントが第一音節から第二音節に、前者では第二音節から第一音節に移動したことになるが、この双方向のアクセント移動がどのように生じたかは不明である。一方 CA *‘ā’iṣah* は [2] で見た *mā’idah* と同じ語形であるが、ここでは *ī* とはならない。これは咽頭音である *‘* が *imālah* を妨げたためと考えられる。

[4] 他の長母音への変化 (1例)

nīb (CA *nāb*) “canine”

24) Yoda Correlation.

25) *xayliyy* Dozy *Supplément* vol. I p. 418.

26) *zayy* *ibid.* p. 616.

2.2. 子音

子音に関しては次のような例が観察される。

[1] 重子音化 (8例)

yadd (CA *yad*) “hand”, *damm* (CA *dam*) “blood”, *famm* (CA *fam*) “mouth”, *qaddīd* (CA *qadīd*) “jerked meat”, *duxxān*²⁷⁾ (CA *duxān*) “smoke”, *nuxxālah* (CA *nuxālah*) “residue left in a sieve”, *littah*²⁸⁾ (CA *liṭah*) “gums”, *rubāʿiyyah* (CA *rubāʿiyah*) “tooth between the foreteeth and canine”

このうち *yadd*, *damm*, *famm*, *qaddīd* は重子音を備えているが、これは現代方言で一般的な形である。中でも *yadd*, *damm*, *famm*, *littah* は、二語根を避けるため重子音化したと考えられる。

[2] 流音間の変化 (8例)

*xayl*²⁹⁾ (CA *xīr*) “gillyflower”, *busl* (CA *busr*) “unripened dates”, *kaddāl* (CA *kaddān*) “soft stone”, *lārang*³⁰⁾ (CA *nārang*) “bitter orange”, *tanğārah*³¹⁾ (CA *ṭarğihārah*) “drinking bowl”, *miʿwan* (CA *miʿwal*) “stone-cutter’s hammer”, *māğin* (CA *māğil*) “cistern”, *qarnab*³²⁾ (CA *qinnab*) “hemp”

現代チュニス方言のいくつかの語では *l* と *n* は弁別性を失い、*l* を持つ形式と *n* を持つ形式がダブルットとして存在している: *ğnam* ~ *ğlam* “sheep”, *māžin* ~ *māzil* “cistern” etc.³³⁾ (Singer *Tunis* p.115)。 *qarnab* は異化によるものである。

[3] 同化 (1例)

yaštarru (CA *yağtarru*) “he ruminates”

ここで CA *ğīm* が無声子音の直前で *ğ* となっている。このことは、古典アラビア語の *ğ* は15世紀のチュニスでは摩擦音 *ʒ* であったことを示す。同様の例は他の地域でも比較的早い時期から確認されている³⁴⁾。

[4] 歯間摩擦音と対応する閉鎖音に関する変化 (3例)

dārā (CA *dārā*) “he cajoled”, *nafada* (CA *nafaḍa*) “he passed”, *šāḍin* (CA *šāḍin*) “gazelle fawn”

27) *duxxān* ibid. p. 428.

28) *littah* ibid. vol. II p. 524.

29) *xayl* ibid. vol. I p. 418.

30) لارنج; ibid. vol. II p. 515.

31) tanğarah; ibid. p. 63.

32) *qarnab*; ibid. p. 348.

33) Singer *Tunis* p. 115.

34) Blau *Diqdūq* p. 37.

このタイプの変化は、lahṇ al-‘āmmah では頻繁にあらわれるものである。現代チュニス方言では歯間摩擦音は保持されているが、いくつかの語で閉鎖音に対応している: CA *ḡaḡaba* > Mod. Tun. *žbid* “to draw” (音韻転化を含む)。上の一番目の例 CA *dārā* > al-Ġum. *dārā* では、本来の閉鎖音が摩擦音化しているが、現代チュニス方言では閉鎖音を持つ *dārā* という形式になっている。

[5] 強勢音に関する変化 (1例)

dāša (CA *dāsa*) “he treaded”

このタイプの変化、特に *šād* と *sīn* の交代も多くの lahṇ al-‘āmmah で引用されている³⁵⁾。現代チュニス方言ではこの交代は多く観察されるが、al-Ġum. では1例しか挙げられていない。

[6] スー音 (sifflant)・シュー音 (chuinatant) の交代 (1例)

*dašiš*³⁶⁾ (CA *ḡašiš*) “ground”

同様の变化は現代チュニス方言でも観察され³⁷⁾、同一語中にシュー音とスー音が同居している場合、シュー音は対応するスー音に変化している: CA *zawḡ* > **zawz* > Mod. Tun. *zūz* “two (< pair)” 等。一方 *ḡ* から *d* への変化は、現代チュニス方言では少数の例で観察される: *dāsūs* (< CA *ḡāsūs*), *dzīrī* “Algerian” (< CA *ḡazārīrī*)。

[7] 他の変化 (8例)

’arr (CA *ḥarr*) “(interj. with which one drives away the donkey)”, *’asā* (CA *nasā*) “vein between the hip and the ankle”, *ḥukk*, *ḥukkah* (CA *ḥuqq*, *ḥuqqah*) “pot”, *yabnūs*, *yabnūz*³⁸⁾ (CA *’abnūs*) “ebony”, *zabaḡ*³⁹⁾ (CA *sabaḡ*) “small shell”, *laqam* (CA *laqab*) “honorific”, *kunwah* (CA *kunyah*) “surname”, *baššīmah* (CA *mašīmah*) “placenta”

CA *’abnūs* > al-Ġum. *yabnūs*, *yabnūz*: 現代マグリブ方言では語頭の短母音 (’v-) が脱落する傾向があるが、時にこれが様々な方策によって回避される。この例は *y* が挿入されている。

CA *laqab* > al-Ġum. *laqam* and CA *mašīmah* > al-Ġum. *baššīmah*: ここでは唇音の交代が観察されているが、このような交代は現代チュニス方言でも頻繁に観察される: *m* > *b*; *mšā* ~ *bšā* “he went” (自由変異), *māšī* > *bāš* “(動詞の直前に置かれ未来を示す)”; *b* > *m*; *mnādim* “human being” (< CA *’ibn ’ādam*), *kamš* ~ *kabš* “sheep”. *bāš* は語源的には動詞 *mšā* “to go” の能動分詞 *māšī* であるが、動詞前辞としては *b* で固定している。

35) Fischer *GAP* Band 1 p. 92.

36) *dašiš*; Dozy *Supplément* vol. I p. 442.

37) Singer *Tunis* p. 202 ff.

38) *yābnūz*; Dozy *ibid.* II p. 855.

39) *zabaḡ*; *ibid.* vol. I p. 578 但し次の意味で; “jais, bijoux de deuil”.

CA *ḥuqq*, *ḥuqqah* > al-Ġum. *ḥukk*, *ḥukka*: 対応する現代チュニス方言の形式は *ḥukka* である。

2.3. その他の現象

[1] 音韻転化 (2例)

*ranġis*⁴⁰⁾ (CA *narġis*) “narcissus”, *nawraq* (CA *rawnaq*) “glamour”

[2] 語頭音脱落 (6例)

ʾammah (CA *mah*) “stop!”, *nawāyah* (CA *nawāh*) “pit”, *zawġat al-raġul* (CA *zawġ al-raġul*) “man's wife”, *sarwal*⁴¹⁾ (CA *sarw*) “evergreen cypress”, *al-ʾism* (CA *al-ism*) “the name”, *ḥiġar* (CA *ḥiġārah*) “stone”

[3] 語末音脱落 (5例)

nisrī (CA *nisrīn*) “white musk-rose”, *mūs*⁴²⁾ (CA *mūsā*) “knife”, *sinn al-ramḥ* (CA *sinān al-ramḥ*) “spearhead”, *ʾišfah* (CA *ʾišfā*) “awl”, *ġanī*⁴³⁾ (CA *ġanīn*) “embryo”

[4] 他の語根の採用

*muqdāf*⁴⁴⁾ (CA *miġdāf*) “oar” ($\sqrt{q-d-f}$).

同一の意味を持った音形の似た別の語根が採用されている。

3. まとめ

全体的に情報量が少ないので、15世紀チュニス方言の音韻論としては決定的なことを言うことは出来ないとはいえ、al-Ġum.では15世紀のチュニスでは様々な音韻に関する現象が観察される。その多くは現代のチュニス方言でも観察されるものであり (2.1.1.[7][9][10][11], 2.1.2.[1][2], 2.2.[1][2][6], 2.3. [3][4])、またいくつかは現代チュニス方言の音韻体系の形成に至る途中経過を示している (2.1.1.[1][2][8])。特に後者に関する記述により、マグリブ方言に特徴的な開音節短母音の脱落は15世紀には未だ完了していなかったことがわかる。また古典アラビア語の短母音の変化は、多くの場合その音質は音韻環境によって決定されており、現在のチュニジア南部の遊牧民方言にみられる現象と共通する (2.1.1.[2] 補足参照)。

その本来の目的から *laḥn al-ʿāmmah* はある時代・場所で用いられていたアラビア語の誤った用法をあげていくものであるが、今回取り扱った al-Ġum. は、その中から明らかに現代方言につながる現象を得ることが出来たという点で、マグリブ東方

40) *runġus*; ibid. p. 561.

41) *sarwal*; ibid. vol. I p. 650.

42) *mūs* (masc.) 語尾の *-ā* を持たない形式はマグリブ諸方言で広く観察される; cf. Dozy *Supplément* vol. II p. 632, Cohen *Tunis II* p. 185, Singer *Tunis* p. 509, Stumme *Tripoli* p. 247, Marçais *Tlemcen* p. 43.

43) *ġanī*; Dozy ibid. vol. I. p. 226

44) *miqdāf*; ibid. I. p. 323.

方言の言語史を探る上で重要な資料である。今回は音韻論に関する項目のみ取り扱ったが、同書には形態論・意味論に関する項目も含まれている。今後は本稿から漏れた部分について研究を進めて行きたい。

[参考文献]

- H. H. ʿAbdul-Wahhâb ed., *Al-Djumâna—étude dialectologique sur les parlers de Grenade et de Tunis au XIV^e siècle* (Le Caire 1953).
- J. Blau, *A Grammar of Medieval Judaeo-Arabic* 2nd ed. (Jerusalem 1980) (in Hebrew).
- G. Boris, *Lexique du parler arabe des Marāzīg* (Paris 1958).
- D. Cohen, *Le parler arabe des Juifs de Tunis. I Textes et documents linguistiques et ethnographiques* (Paris 1964), *II Étude linguistique* (Paris-La Haye 1975).
- R. Dozy, *Supplément aux dictionnaires arabes* vol. I, II (Leide 1881).
- W. Fischer Hrsg., *Grundriß der arabischen Philologie. Band I: Sprachwissenschaft* (Wiesbaden 1982).
- J. Grand'henri, "Les variantes de flexion dans les verbes géminés en arabe" *Folia Orientalia* XXVIII (1991) 99-114.
- P. de Lagarde ed., *Petri Hispani de Lingua Arabica Libri Duo* (Gottingae 1883).
- Laḥn al-ʿāmma EI².
- Ph. Marçais, "Contribution à l'étude du parler arabe de Bou-Saâda" *Bulletin de l'Institut Français d'Archéologie Orientale* 44 (1945) 21-88.
- W. Marçais, *Le dialecte arabe parlé à Tlemcen. Grammaire, textes et glossaire* (Paris 1902).
- W. Marçais, "Les parlers arabes" in *Initiation à la Tunisie* (Paris 1950) 195-219.
- W. Marçais et A. Guîga, *Textes arabes de Takroûna I textes, transcription et traduction annotée* (Paris 1925).
- C. Schiaparelli, *Vocabulista in Arabico* (Firenze 1871).
- H. -R. Singer, *Grammatik der arabischen Mundart der Medina von Tunis* (Berlin-New York 1984).
- H. Stumme, *Grammatik des tunisischen Arabisch – nebst Glossar* (1896 Leipzig).
- H. Stumme, *Märchen und Gedichte aus der Stadt Tripolis in Nordafrika* (Leipzig 1898).
- S. Yoda, "The Correlation between Short Vowel Subsystem and Long Vowel system in the Modern Maghribi Dialects" *Annals of Japan Association for Middle East Studies* no. 15 (2000a) 91-125.